

日本統計学会会報

NO.107 / 2001. 3.10

発行——日本統計学会
東京都港区南麻布4-6-7 統計数理研究所内
〒106-8569 Tel 03-3442-5831 Fax 03-3442-5924
編集責任—小西貞則(理事長)/伊藤 聡(庶務理事)
渡辺美智子(広報理事)/瀧尾 隆(広報理事)
振替口座—00190-2-61361
銀行口座—第一勧業銀行広尾支店普通1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 会長就任のご挨拶	杉山高ー	1
2. 会長退任のご挨拶	三浦由己	3
3. 第69回大会について		4
3.1 大会日程		4
3.2 大会の特色		4
3.3 チュートリアルセミナーのお知らせ		5
3.4 研究報告の募集		5
4 シリーズ:「統計学と数学」	坂田年男	7
5 シリーズ:「統計学の成果と計算機科学の発展」	橋本明浩	10
6 チェンナイ国際会議に参加して	景山三平	12
7 海外研修雑記	西尾 敦	13
8 国際会議へのお誘い		14
8.1 計量心理学会国際大会(7月)		14

8.2 情報社会のための統計に関する		
IAOCサテライト・ミーティング(8月)		15
8.3 Intelligent Statistical Quality Control		
に関する国際Workshop(9月)		16
8.4 第4回ARS(アジア圏計算機統計学会)(12月)		16
9 研究部会活動中間報告		17
9.1 データマイニングにおける統計的手法と実際	鎌倉稔成	17
9.2 環境データの解析	清水邦夫	17
10 2000・2001年度第2回評議員会議事録		18
11 日本学術会議報告	吉村 功	20
12 会合および外国人研究者来日案内		21
13 教官公募のお知らせ		22
14 事務局から		23

日本統計学会会長選挙開票報告

本学会細則第4条による2001・2002年会長選挙の投票を12月15日で締め切り、12月20日に日本統計学会事務局において開票した結果、杉山高一氏が当選しました。

2001・2002年会長選挙管理委員会 栗木 哲、渡辺則生

1 会長就任のご挨拶

杉山 高一(日本統計学会会長)

このたび評議員会の推薦と会員の皆様の信任を受けて、会長に選ばれましたことを大変光栄に思っております。21世紀最初の2年間、会長として学会の発展に努めますので、これからも会員の皆様の建設的なご意見とご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。今回、会長就任のあいさつを書く機会が与えられましたので、この場をお借りしてこの学会について私が日頃考えておりますことを少し述べさせていただきます。

国際統計協会(I.S.I.)を見ていて感じますこと

は、統計学の大きな広がりです。日本統計学会(以下では統計学会と省略)の活動は、その一部分しか行っていないという印象を受けます。それは、統計学会が統計学の広がりに応じ、それを許容し、支援する積極的な姿勢があまりなかったからとも考えられます。私達



は統計学の新しい分野で活躍する会員が、会員外の方々と協力して、学会の中で活発に研究している雰囲気とシステムを作る必要があります。

上記のことに関連していますが、統計学会では期間が2年の研究部会があり、約4件が常時活動しています。その件数を増やすこと、2年ではなく5年という期間も検討に値することです。また、それが発展したひとつの形態として、分科会の設置が考えられます。その場合、そこでの研究成果を迅速に発表する方法が課題となってきますが、その一つの解決法としてはインターネット上での電子ジャーナル発行のようなものが考えられます。

統計学会は前理事会のときに、自前のサーバをもち、ホームページの充実に努めてきました。理事同士の連絡から、学会発表の申し込みまでインターネットの活用が増え、電子ジャーナル発行も可能になってきていると考えています。この他にも、統計学に関連した本や辞典で、名著ではあるが絶版になった書籍を電子化して、会員の誰でもみることができるようになることも可能です。また、会員が作った優れた計算プログラムも多数あります。それらを活用して、統計学会へデータを送ると計算して数値結果を返すようなサービスも考えられるでしょう。これらは会員外の方々（世の中へ）のサービスにもなり、統計学の普及に貢献することになります。統計学会が幅広い活動をしていく上で、これからもIT化の部門の充実は重要なことです。

自分の話をするのは気がひけますが、私は高等学校のときに、確率の授業を受けました。その分野がおもしろくて、家に帰ると毎日約一ヶ月間、確率の問題を解いたり勉強をしていました。大学に入り統計学の授業をうけたとき、真壁肇先生の名講義のお陰にもよるのですが、確率のおもしろさから統計学の魅力に引きつけられました。小・中・高・大のいろいろな場所で、確率と統計の授業がありますが、優れた教材と魅力ある授業法を研究することは大切なことと、私は認識しています。統計学会の中に、統計教育委員会があり、

精力的に活動をしています。委員会では教材や授業法だけでなく、学校教育の中で確率と統計の内容を適宜加えることを世の中に示し続けています。統計教育委員会も分科会のような形を考えて、自分たちの研究成果を会員の方へ世の人々へ積極的に情報提供されるとよいと考えます。その際に、学会のサーバの活用はたいへん有効です。

研究成果の発表の場として、統計学会は1年に1回大会を開催しています。科学の進歩の早い現代において、1年に1回だけというのは少なすぎるように思いますが、2回開催することは現状では不可能です。それを補うものとして、統計学をテーマとした科研費の基盤研究（A）、（B）は価値があります。一年のいろいろな時期にいろいろなテーマでシンポジウムがあることは、会員にとってメリットのあることです。私も研究代表者として、現在「統計学における理論と応用の総合的研究」（2000年度1,670万円）のテーマで行っており、研究は来年度も続きます。この科研費の大部分は研究発表のための研究旅費とそれにかかる開催費として申請しています。このような形でこれからもいろいろな方が研究代表者として継続していただければと願っています。これが役割を果たすためには、分担者になった方々の明確な意識と献身的な努力が必要と考えています。若い方々の協力も重要ですのでよろしくお願い申し上げます。

統計学会は前理事会から国際化を一つの重要なテーマとして取り組んでいます。統計学会に関する情報を諸外国の統計関連学会へ提供すること、また外国の統計関連学会の情報を会員の皆様へお届けすることを強化することが大切です。国際統計学会の日本人会員を増やし、より積極的な貢献をすること、またアジアの国々の中で日本がこの地域の統計学の研究に積極的に貢献することが期待されています。御存知のように会員方の献身的な努力によって日中統計会議、日韓統計会議が20年近く続けられ、良い協力関係ができあがっています。例えばそれを発展させた形で、東アジア統計会議のようなものを構成することも考えられま

しょう。日本統計学会が中心になり、統計学においてもアジアの中で、日本なりの貢献を真剣に考える時期にきているように思います。

日本には統計学会をはじめとして、統計関連の学会がいくつもあります。どのような側面でお互いに協力することができるかを考えることは重要です。例えば欧文誌を編集者や発行所はそれぞれ現状のままで、共同で発行する形態をとること(詳しいことは省略いたしますが、いくつかの大きな利点が考えられます)、学会開催を共同で行うこと等々、いろいろと考えられます。これから

は、学会同士の結びつきが強くなる方向へ進むものと思っています。その他に学会賞の充実等いろいろとありますが、紙面の都合もあり、別の機会にいたします。

統計学会は70有余年の歴史と立派な伝統があります。この伝統ある学会の会長を21世紀の初頭に務めさせていただく責任の重さを感じています。今世紀もこの学会が国内および国際社会でより重要な役割を果たせるように、皆様方と力をあわせて、学会活動を進めていきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

2 会長退任のご挨拶

三浦 由己(前日本統計学会会長)

会長の任期の2年間がまたたく間に過ぎてしまいました。この間、理事長をはじめ理事の皆さん方には色々とお助けいただき、心から感謝しております。70年の歴史を持つ伝統ある本学会ですが、新しい時代の動き、社会経済の変化に伴って、その果たすべき役割はますます大きくなってきています。

統計学の進歩、発展に寄与するという本来の目的を追求することはもとよりですが、国内および国際社会に対する責任も学会として考えなければならない重要なことではないかと思います。例えば、最近、経済運営の基礎となる経済統計の正確性について、マスコミや一部の人が疑問を呈し、政府統計の信頼性を揺るがしかねない議論がしばしば行われていますが、統計の専門家の集まりである本学会が専門的な立場でこの問題を検討し、その解決に寄与することができるのではないかと思います。

また、情報があふれる現代社会において、学校における統計教育、市民生活の中で一般の人が情報を正しく理解し、正しく使うようになるための

啓蒙なども、学会が果たし得る貢献だと思います。

言われて久しい国際化への対応もまた重要です。国際統計協会(I.S.I.)や諸外国の統計学会との連帯や協力は、引続き強化していかなければならないことです。特にアジア諸国の学界、政府統計機関、産業界との統計協力は、一層推進しなければなりません。

このような色々な課題に取り組むには、本学会と他の統計関連学会との連携、協力をもっと強める必要があると思います。そのためには、学会の組織や活動のあり方を長期的な視野に立って考えてみる必要があります。

私はこのような問題意識を持って学会の運営に取り組んできましたが、任期中に道筋を付けてところまでは行きませんでした。幸い、学会の事情に明るい杉山先生が会長に就任されたので、新会長の下で、新しい意識で、学会が色々な課題に立ち向かって前進し、新しい時代に相応しい姿で発展を遂げ、責任を果たすことをお祈りします。

3 第69回大会について

3.1 大会日程

日本統計学会第69回大会は以下の要領で開催される予定です。日程が例年の開催時期と異なっておりますので、ご注意ください。

主催校：西南学院大学

場 所：西南学院大学キャンパス

(福岡市早良区西新6-2-92)

期 間：2001年9月1日(土)～9月4日(火)
の4日間、ただし9月1日(土)は、
チュートリアルセミナーと評議員会

3.2 大会の特色

日本統計学会理事長 小西貞則

日本統計学会第69回大会は、2001年9月1日(土)から9月4日(火)までの4日間、福岡市の中心近くに位置する西南学院大学で開催されます。例年と開催時期が異なりますが、これは、2001年8月22日～29日に韓国ソウルで開催されます第53回ISIセッション (ISI2001)に参加された海外の研究者の方に、ここ福岡での統計学会大会へも立ち寄っていただきたいということもあります。

アジアに開かれた都市福岡と韓国は地理的にも極めて近い位置にあり、空路(ソウル便、釜山便)も航路(釜山から3時間)も利用できます。また、ISIセッションのサテライトミーティングとして以下の国際会議が開催されます。

◆2001年8月20日～8月21日(慶應義塾大学)

「The 2nd International Symposium on Business and Industrial Statistics」

<http://www.stat.t.u-tokyo.ac.jp/isis2/>

◆2001年8月30日～8月31日(総務省統計局・統計センター主催：アルカディア市ヶ谷(私学会館))

「情報社会のための統計に関するIAOSサテライト・ミーティング IAOS Satellite Meeting on Statistics for the Information Society」

<http://www.stat.go.jp/english/iaos/>

◆2001年8月30日～9月1日(日本計量生物学会主催：福岡市ソフトリサーチパーク)

「環境と健康：統計科学からの挑戦国際会議
International Conference on Statistical Challenges
in Environmental Health Problems」

<http://www.math.kyushu-u.ac.jp/ISCEP/>

◆2001年8月30日～9月1日(日本計算機統計学会主催：大阪大学コンベンションセンター)
「計算機統計学の最近の潮流と医学・生物学への応用International Conference on New Trends in Computational Statistics with Biomedical Applications」

<http://www.jsccs.or.jp/ICNCB/>

数年前から日本統計学会大会での講演数は250を越えるようになりました。そこで本大会では3名の大会企画担当理事(岩崎学、鎌倉稔成、田中勝人の各氏)を中心としてプログラム編成委員会を構成し、本号に掲載されているような興味あるチュートリアル、共通テーマを企画していただきました。本大会および国際会議の掲げるテーマ、セッションは、高度に発展しつつある情報技術社会の中で、統計的方法の応用範囲がますます拡大の一途をたどっていることを示しています。統計科学の成果の有効利用が社会から待望され、同時に統計科学という枠組みの中で新しい学問分野の展開へと結びついてほしいものです。

連続して大きな会議が開催されますが、杉山高一会長、理事一同、安楽和夫大会運営理事をはじめとした西南学院大学の関係者と協力して準備を進めておりますので、たくさんの方々にご参加いただき21世紀の幕開けにふさわしい実りある学会となりますようお願いしております。

3.3 チュートリアルセミナーのお知らせ

大会企画担当理事

岩崎 学, 鎌倉稔成, 田中勝人

恒例になりました統計学会チュートリアルセミナーを今年度の大会(西南学院大学)でも実施いたします。予約制といたしますが、申し込み方法の詳細につきましては、次号の会報にてご連絡申し上げます。

◆期日: 2001年9月1日(土)

(午前と午後それぞれ1テーマ)

◆テーマ

1. ウェーブレットと統計解析

(オーガナイザー: 田中勝人(一橋大学))

2. 臨床試験を支える因果推論

(オーガナイザー: 柳本武美

(統計数理研究所))

テーマ1の「ウェーブレット」は、画像データや時系列データなどを処理・分析する方法として、10年近く前から統計学の分野でも使われ始めています。背後にある基本的な考え方は、「ウェーブレット変換」を適用することにより、データを時間と周波数(スケール)という2つの観点から同時に、かつ局所的にとらえるもので、従来の時間領域のみの分析、あるいはフーリエ変換による周波数領域のみの分析を超えるものとされています。

統計学に関連して今までに行われたウェーブレットの応用としては、確率密度関数、回帰関数、トレンド、スペクトラムなどのノンパラメトリック推定、cross-validation, smoothing, 変化点の検出、長記憶モデルの推定などがあり、現在も、理論、応用の両面でますます発展を続けています。したがって、上記以外にも、ウェーブレットの利用価値は潜在的に十分あるものと思います。今回のセミナーでは、ウェーブレットの基礎から応用までを、統計学の立場に焦点を絞って解説していただきます。

テーマ2の「臨床試験を支える因果推論」の内容は以下の通りです。臨床試験で治療の効果を評

価するとか、病気になりやすい生活習慣を調べるとかは、結局因果関係を推論しています。その推論は試験の計画・実施とデータの解析及び考察、つまり統計的な方法、を通してなされます。意外に知られていないことですが、前世紀特にその後半は、因果推論についての深い理解が進んだ時代だったのです。そして選択バイアス、反現実、観察の理論依存性、反証可能性など多くの用語により理解が進みました。

このチュートリアルでは、何故臨床試験のような厳密な手続きが必要なのか、を理解することを目標に、因果推論の進展を俯瞰します。その中で、試験の計画の重要性、無作為化と統計的検定の役割、対照群の必要性などを初めから解説します。更に因果推論についての深い理解が、斬新で有用な試験デザインと推論に即した解析法を開発するのに役立つこと、にまで進めればと思います。統計学と臨床試験の基礎を学びたい方々を対象とします。

3.4 研究報告の募集

大会企画担当理事

岩崎 学, 鎌倉稔成, 田中勝人

日本統計学会第69回大会は、福岡の西南学院大学を会場に9月1日(土)~4日(火)に開催されます(注: 9月1日(土)はチュートリアルセミナーで講演等はありません)。すでに会報106号で共通テーマをお知らせしましたが、一般演題および共通テーマに関する報告の申し込みを以下の要領で受け付けますので奮ってご応募ください。なお、数年前より従来の郵送による申し込みのほかに学会のホームページ(<http://www.jss.gr.jp>)や電子メールによる申し込みも受け付けています。作業の効率化のため、なるべくホームページあるいは電子メールをご利用ください。

講演申し込みの締め切り期日は、

5月7日(月)

です。また、海外在住の非会員の方も報告発表が

できます（応募の際に報告集原稿（A4で2ページ）と報告要旨（100words以内）を提出し、1万円または100米ドルの事前登録料が必要です。詳細については統計学会のホームページをご覧ください）。

◆申し込み方法

ホームページや電子メールによる方法と郵送による方法があります。詳しくは本会報に同封しました「日本統計学会第69回大会のお知らせ」をご覧ください。

◆研究報告集・報告要旨原稿用紙の送付

ホームページや電子メールあるいは郵送で報告申し込みをされた方には、プログラム編成委員会の開催後、報告決定の通知、研究報告集用原稿用紙、報告要旨用原稿用紙をお送りいたします。

原稿用紙は、記入要領をよくご覧の上、

締切日 7月7日（土）

までにご提出ください（締め切り厳守）。締め切りまでに研究報告集・報告要旨の原稿が届かなかった場合は、報告決定を取り消すことがありますので、必ず期限を守るようお願いいたします。

◆共通テーマのお知らせ

本大会では、下記のように10の共通テーマを予定しております。これらのテーマの詳細につきましては前号の会報（会報106号）をご覧ください。会員の皆様がこれらのセッションに積極的に参加されることを希望します。なお、共通テーマに興味のある方は、それぞれのオーガナイザーの方に直接お問い合わせください。

●統計分野におけるインターネットの活用

オーガナイザー：中野純司

（統計数理研究所統計計算開発センター）

〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7

TEL：03-5421-8791, FAX：03-5421-8791

E-mail：nakanoj@ism.ac.jp

●統計理論と金融工学

オーガナイザー：三浦良造

（一橋大学国際企業戦略研究所）

〒101-8439 東京都千代田区一ツ橋2-1-2

学術総合センター内

TEL：03-4212-3098, FAX：03-4212-3069

E-mail：cc00054@srv.cc.hit-u.ac.jp

●官庁統計の現状と課題

オーガナイザー：加納 悟

（一橋大学経済研究所）

〒186-8603 東京都国立市中2-1

TEL：042-580-8372, FAX：042-580-8333

E-mail：kanoh@ier.hit-u.ac.jp

●マルコフ連鎖モンテカルロシミュレーションを用いた実証分析

オーガナイザー：和合 肇

（名古屋大学大学院経済学研究科）

〒464-8601 愛知県名古屋市中千種区不老町

TEL：052-789-2378, FAX：052-789-4924

E-mail：wago@ism.ac.jp, hwago@fd.catv.ne.jp

●九州経済の統計分析

オーガナイザー：新谷正彦

（西南学院大学経済学部）

〒814-8511 福岡県福岡市早良区西新6-2-92

TEL：092-823-2501, FAX：092-823-2506

E-mail：shintani@seinan-gu.ac.jp

●非線形・複雑系への統計的アプローチ

オーガナイザー：大瀧 慈

（広島大学原爆放射能医学研究所）

〒734-8553 広島県広島市南区霞1-2-3

TEL：082-257-5852, FAX：082-256-7106

E-mail：ohtaki@ue.ipc.hiroshima-u.ac.jp

●逐次解析の最近の発展

オーガナイザー：百武弘登

（九州大学数理学研究院）

〒810-8560 福岡県福岡市中央区六本松4-2-1

TEL, FAX：092-726-4786

E-mail：hyakutak@math.kyushu-u.ac.jp

●事前情報のある統計モデルの解析法

オーガナイザー：坂田年男

(九州芸術工科大学)

〒815-8540 福岡県福岡市南区塩原4-9-1

TEL：092-553-4450, FAX：092-553-4569

E-mail：sakata@kyushu-id.ac.jp

●不完全データの解析

オーガナイザー：岩崎 学

(成蹊大学工学部)

〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

TEL：0422-37-3764, FAX：0422-37-3871

E-mail：iwasaki@is.seikei.ac.jp

●臨床試験の計画

オーガナイザー：鍵村達夫

(日本ベーリンガーインゲルハイム)

〒666-0193 兵庫県川西市矢間3-10-1

TEL：0727-90-2449, FAX：0727-90-2691

E-mail：kagimura@boehringer-ingelheim.co.jp

シリーズ：統計学の現状と今後

4 統計学と数学

坂田 年男 (九州芸術工科大学)

原稿の依頼を受けて、「統計学と数学」というタイトルで申し込んでみたものの、いざとなって、私に「数学」を語る資格も無く、それといって統計学の未来を見据えた知見もなしという具合で、心から困ってしまいました。仕方なく、大所高所からの議論は次回の方に全部お任せすると開き直って、ごくごく身近な話題から、それも失敗談をベースにすれば同じ間違いをしないですむ人が何人かはできるのではないかと思います、筆を進めることにしました。

教育と研究に分けて話をします。私が昨年から所属している九州芸術工科大学は5学科編成で、私は工業設計学科という学科に所属しています。その中も3講座に分かれていて、インダストリアルデザイン、人間工学、知的機能講座に分かれています。こちらへ赴任して、一番うれしかったのは、結構、統計が使われていて、最初の会議で博士論文の審査があったとき、そのタイトルに統計用語が載っており、概要を読んでも応用統計といってもよいような内容のものが2, 3ありました。ここでは、評価は別として、統計が積極的に使われていましたので何となく嬉しく思いました。特に、人間工学という学問があることをはじめて知ったのですが、人間に関するさまざまなデータを取り、それからそれ自体の知見と統計処理が組み

合わさって結論が引き出されるようで、統計家(?)としてとても面白いと思います。

熊本大学に所属していた時は医学部の学生の統計学を指導もし、また論文の統計処理をお手伝いしたこともあります。医学部でもよく統計を使うと思いますが、医者が統計家を評価しているよりもこの方が少しましに評価してくれている風情がある(誤解かも?)のも嬉しいことです(情報系でも統計を教えた経験があるのですが、学生の統計に対する評価はやはり今一步だったように思います。コンピュータが第一にくるせいでしょうか? 状況は医学部に近いかも知れません。主要学科目の負担が大きすぎて、そこまで気がまわらないといったところでしょうか?)。そして、学生に研究での必要性を意識させながら授業をすると、かなりよく聞いてくれるので、有難いことです。やはり、「必要性があってこそ身も入る」という原則は逃れがたいものだと思います。したがって、如何に上手に学生に必要性をアピールするかが肝要なことかもしれません。また、大学院生から繰り返しデータに対する分散分析の方法の講義の依頼を受けて、あれこれ調べてまともな参考書がなくて、インターネットで資料を作成するなどということも早速ありました(恥ずかしい話、まともにまだ講義ができていませんが、こんな大

事なことがきちんと書かれた日本語の本がないというのは不思議な気がします)。これで、古典的だが大切な分野がまだ在るんだと知りました。また、インダストリアルデザイン講座では調査データを解析することが多くて、多変量解析を使っている先生がおられます。役に立つという意味ではこういう分野では結構統計も有難たがられることを知りました。まだまだ、私の知らない多くの分野で統計は使われているのでしょう。「必要とされている限り」統計が廃れることはないでしょう(ということは何が必要とされているか、またはこれから必要となるかに対して、我々は敏感であらねばならないということかもしれません)。が、必要とされている知見は大体古典的なものであって、必ずしも最新のものではないようです。それらが浸透するにはかなりの年数がかかるでしょうし、またそこまで教えるとなったら、現在の統計の時間数ではとても足りないのは明らかです。

さて、熊本大学の教養部(なつかしい響きです)に昭和53年から在職し、文系、理工系の学生、そして医学部の学生、情報系の学生、そして今の芸術工学の学生と、かなり広い範囲の学生を教えてきましたが、今の学生が一番熱心に聞いてくれます。こうした経験から得たことは(私の力不足を横に置いておくとして)、「必要のあるところでは、質のよい学生は自然と興味を持つ」、「あまり数式の運転はやめにしたほうが学生には効果がある。出席しなくなるより、何でもいいから聞いてくれたほうが絶対によいことだ(学生は統計を広める第一歩である)。こういうことがわかるまでには時間がかかる。だから、統計をうまく教えるのには年季がいる。」「学生の所属する学部に関連するデータを解析して見せるのがよいが、生のデータにはなかなかアクセスできないものだ。また、自分のプレゼンテーションのまづさはいつも気になっている。シンポジウムで見かけるすばらしいプレゼンテーションをされる先生に習っている学生は幸せだろうなといつも感心させられる。それで、自分もだれかに徹底して習わねばと

思っている(自学自習WEBがあればすぐにでも見に行くのですけど)。」「もう少し、図や絵を使い、コンピュータを使って物事を動的に提示したほうが理解を助けることは間違いないが、反面、それは必ずしも本質的なことではないような気もする。人間はやっぱり手を使って計算して理屈を頭でこねまわしてこそ、本当に理解できるものだと思う。」こんなことです。また、できれば教科書は学生の質に合わせて自分で書くのが良いように思います。学生にとって必要十分な教科書はなかなか無いものです。特に、確率過程において教科書を探してみてもう思いました。また、統計関連の図やグラフやデータを誰もが気軽に入手でき、使い勝手がよいWEBがあれば助かりますね。多分私の知らないだけかもしれませんが(その際、解析結果だけではなく、オリジナルなデータもあるべきですね。結果だけではほとんど授業には使い道がありませんから)。

研究の話に移りますと、昭和49年に九州大学の修士課程に入学して以来30年近く勉強して身にしみて理解したことは「統計学全体の中でもやはり流行や変遷がある」ということです。20数年前に研究をかじり始めたときは、測度論を使ったまさしく確率(統計)のような統計がはやっており、Berkley Symposiumでもそういう話がたくさんあったように思います。が、今は、余り見ません。またRaoの分布の特徴づけなどもありました(自分もはまりました)が、それもあまり見なくなりました。ノンパラメトリクス統計も少なくなりました。もちろん、これらの分野で御活躍されている方々もたくさんいますが、確かに時代は少しずつ動いています。中でも「計算機統計学」が起ってきたことは象徴的です。しかし、「新しい時代の要請するものの中でも、やっぱり自分に向いたものは探せるもので、道はひとつではない。個性を生かせる道を探すべし」ということも確かです。手前味噌になり恐縮ですが、私のここ何年かの仕事はグレブナ基底とMCMCの話に関するものですが、計算機が絡む統計がはやってきたとき、やっぱり、何かしらそれに関係する仕事が

したくなるのは人情でしょうし、正常な感覚だと思います。しかし、計算機そのものは全く得意でない。そういうときにDiaconis and Strumfelsの論文が目に入りました。MCMCというcomputer intensive な統計の中にグレブナ基底という代数幾何学で現れる概念が使われていたのです。とても驚き、先の法則を確認したのです。ごく最近では、あまり良く理解できないのですが、量子計算という分野と統計学との接点に興味を持っています。大量データをWEB上で扱うというDATA MININGという手法を最近しばしば耳にします。それで、学生のセミナーにそのテーマに的をしばって少し勉強をはじめたのですが、なんとなくしっくりこない。簡単にいえば、巷でもよく議論されているのですが、統計とどこが違うの？ という疑念がぬぐえない（専門家の方、理解不足でご免なさい）。で、やめようかな、と思っていたときにめぐりあったのが量子探索理論という話でした。無数のデータからの探索時間を平方根まで縮めるアイデアがあると知り、それは面白いとなったわけです。調べていくと、なんと、平均値探索量子アルゴリズム、数値積分量子アルゴリズム、量子random walk 理論までできているではありませんか？というわけで、またまた、「道は一つでない」という法則を再確認した次第です。また、その境界領域が気に入っているもうひとつの理由は文献の手に入りやすさですね。これはその分野が発展するための絶対条件ではないでしょうか。この分野では、ほとんどの文献が無料で開放されています。どんどん文献が増えていきます。文献目録がWEBから自動的にどんどん送られてくるので気に入った論文をWEBから取り寄せるのです。この快適さに慣れると、もう雑誌など見る気がありません。何年もおかかってやっと現れる論文（著名な雑誌ほどそうですね。確かに質の高い論文ばかりですが）を、高価な雑誌代金を払って、ようやく見られるような現在の雑誌のシステムはもう時代遅れではないかと思いつつ、文献サーフィンを楽しんでいます。統計の世界もはやくこうなったら嬉しいですね。

最後にまとめると、「若い人は時代の要求する統計学に挑戦しよう（遺伝子関係のデータ解析、データマイニング、環境データの解析、MCMC、…などなどたくさんありそうです）。」「しかし、すべての人が同じことをやらなくてもよいのだ。道はひとつではない。」「文献は人類の財産だ。誰もがいつでもWEB上で見られるようなシステムを構築すべきだ。」「統計屋の使う数学は純粋数学者のいう数学とは目標が違うけれども、同じ人間の考えること、結構、どこかでつながっているもので、結構質の高い応用が突然現れることもしばしばである。」「コンピュータだけでは人間は納得しないのかもしれない（正確にはそういう人もいるというだけかもしれませんが）。どこかで、論理的に納得する必要がある。それが数学かもしれない。その意味では、統計に（といわず何にだって）数学はいつまでたっても必要ではないだろうか。」こんなことです。それから、「若いときに受けた教育がいつまでもついて回る」ということを強調しておきたいですね。なかなか、年を重ねて勉強しても、内容が心に食い込むのは容易ではありません。そういう意味で、大学院生の時には十分広く、基礎的なことを学んでおくこと（大学院カリキュラムの充実？）。学部では数学の基礎的部分、コンピュータやアルゴリズムなども十分広く学んでおくことは大切なような気がします。幾何学がわからないばかりに、情報幾何学が理解できないことや、確率過程をしっかり学んでこなかったために、最近の金融工学に関連する統計学がいつまでも心にしっくりこないのはやはり、怠慢の付けが回ってきていると反省しています。また、生物学や医学や物理学や経済などの個別科学の常識も若いときに身につけておくのが良いように思います。遺伝子解析と結びつく最近の重要な統計問題が遺伝子の構造を何回聞いても理解できないので（理解してもすぐに忘れるというのが、老いて学ぶことのどうしようもないところですが）踏み込めないのはやはり怠慢の付けです。このようなことがいつ起こるかも知れないので、若いときの広い基礎的勉強が重要なわけです。

それから最後に思いついたことは、研究には刺激が必要ですが、それには優れた人に会うことが一番ですね。東京にはたくさん外人も来ているのですが、九州には九大に年一人か、二人来られる程度ですね。「できれば関西以西に、もうひとつ、統計・情報関係の研究所でもできて、月に二人くらいは外人が講演にくるような環境があればいいな」などと思うこのごろです。それとこれからいろんな分野との境界領域でいい仕事がありそうです。そういう人達との接触のある方々を

シリーズ：計算機科学と統計学の現状と展望

5 統計学の成果と計算機科学の発展

橋本 明浩（千葉大学総合情報処理センター*）

*平成13年4月より総合メディア基盤センターへ改組の予定

はじめに

計算機科学（Computer Science）の進展と現状を簡単に表現することは困難なことであろう。計算機科学は急速な技術革新と爆発する現状に追いつけられながら、急速な発展を遂げているからである。数学のように定義、公理が明確なものでなく、流動的に変化し拡張している。具体的には、新しい技術開発によって過去の定義・概念・標準が変化し広義化している。例えば、旧来の中央処理装置の概念・定義はマルチプロセッサ、ネットワークコンピューティングによって広義化し、アルゴリズムの評価基準をも変化させている。1年前の先端技術が現在の普通の技術に、現在の普通の技術が陳腐な技術に変貌している。研究対象も次々と新規のものが現れる。それ故、ACM（Association for Computing Machinery）の研究活動はSIG（Special Interest Group）を中心に行なわれ、新しい研究テーマに柔軟に対応できるように工夫している。計算機科学の中心であった古典計算機論、数値計算論、データベース論は周辺に退き、Bio/DNA Computing, Mobile Networking, Quantum Computing等の研究が萌芽しはじめていていると言われているが、今後の10年間にわたり研究の中心で

ある保証はなく、浅学の私には予測の域を越えていると思われる。そこで、計算機科学・技術の急速な発展中のトピックをいくつか列挙し、統計学の成果が必要ではないと思われるような点について述べる。先輩諸兄の率直なご意見、ご批判をいただきたい。

超高速性と統計学

はじめに、超高速サーバマシンのパフォーマンス改善について考えよう。サーバマシンはUNIX系列のOSで稼動し、近年のE businessの中心となって稼動しているコンピュータである。卓上のPCと異なり、サーバマシンの能力を十分に引き出すためには、入念なパフォーマンス改善技術が必要であり、これを怠ると全く役に立たない計算機システムになってしまう。

サーバ計算機は通常複数個のCPUが実装されるが、CPU数を増加させれば良いパフォーマンスが得られるわけではない。「CPUの数を2倍にしたら、実行が8倍遅くなった。」とか最悪の場合は「動作しなかった。」とかという笑えない結果になるのである。簡単に言えば、軽自動車に大型トラックのエンジンを10台積載した状態である。身近な例では、ありえない話となるが、サーバマシン

の設計では起こりうる。このような問題を回避し、定まった条件の下で、最適なCPUの個数、メモリー容量、入出力機器等を考察する話題は実際には発表されていない。これらは、OSの種類、動作アプリケーションに依存しているだけでなく、様々なシステムパラメタとも密接に関係している。経験豊かなエンジニアが決定して、障害が起きた場合だけ、システム計測ユーティリティで計測し対策を考えるのが現状である。最先端のサーバマシンが人の勤と勇気(?)で決定されている不思議な現実がある。測定された多くのデータの統計的、数理解析をすることはなく非常に残念に思っている。

次に超高速ネットワークについて考えよう。超高速のネットワーク技術の研究開発は、世界的に注目を浴びている。数年前に研究対象であったギガビットネットワークはすでに実用に供されているので、約4年で1000倍の高速化がなされている。「CPU処理能力が18ヶ月で2倍の増加」(Intelの共同創設者Gordon Mooreが提唱、ムーアの法則と呼ばれる)であるから、その法則を超える性能増加率がネットワークの世界で起きていることになる。現在の最先端のネットワーク技術で注目されているのは、1Tbps (Tera bit per second= 10^{12} ビット/秒)以上の伝送速度を持つネットワーク技術である。

この超高速ネットワークの実現には、いくつかの困難さが存在している。1つにはルーティング(Routing)問題である。異なる2つ以上のネットワーク間を結ぶにはルータ(Router)と呼ばれる装置で相互接続をおこなう。相異なる10個の1Tbpsのネットワークを相互に接続することを仮定すれば、ルーティングに関して、一秒間に 10^{13} パケット以上の処理能力が最低限必要である。最新のCPUの内部処理周波数(マシンサイクル)が1.5Ghz (10^9)程度であることを考えれば、如何に高速な処理を必要としているかわかる。1マシンサイクルの時間で、光でも17cm程度しか進むことはできない。光速の数百分の1程度といわれる電子の速さでは、ミリ単位以下の移動距離であ

る。送出データパケットの行く先をあらかじめ、時間的に確率的に予測し、高速に判断するアルゴリズムが必須の技術が重要なものとなるように思われる。

ネットワークは情報の道路と考えれば、行き先、使用目的などをより正確に予測するための情報の取得が必要である。しかし、超高速ネットワークでは、そう容易なことではない。FDDI (Fiber Distributed Data Interface, 1秒間に108bitの伝送速度)での使用プロトコル別、行き先分類等の全数検査は数分でも困難である。しかし、標本調査技術の確率比例抽出の応用で、かなり簡単に正確な調査ができる。交通量調査以上に時間、週、曜日、季節に極めて典型的かつ規則的な傾向があることが示せる。次世代のInternetで標準になるといわれるQoS (Quality of Service, 通信品質)を正常かつ効率的に機能させるには、詳細な通信トラフィックの調査が必要不可欠であることは言うまでも無い。

超大容量と統計学

超大容量広域データベースの話題を終わりに挙げる。WWW上の文書は3億4千ページ以上と報告され、現在は5億ページ以上あると推定されている[1]。このような巨大なデータに対して同時利用の全文検索は不可能である。いくつかの検索サービス提供会社は文書を図書館の十進分類のように分類した後に、索引をつけ、検索キーワードも同様な分類を行い、同一分野でのキーワード検索で検索効率を上げている。検索結果の表示から検索者がそのページを見に行ったかも、ポイントになる。しかし、自分の思う検索結果を出すことは容易ではない。上手な文書分類、キーワード分類がなされていないのでは?分類手法に統計学の手法が使われているか?と疑わせるような稚拙な検索結果しか表示されない。

むすび

計算機科学には不思議なほど統計学の成果・手法は取り入れられていない。紺屋の白袴という言葉があるが、情報工学、情報処理工学と一見近い分野と思われながら意外な事実である。計算機科

学科、情報科学科、情報処理科の多くはシラバスをWWWで掲示している。WWWの中で見る限り統計学という科目を見つけることは困難であった。理由はどうも、主観かもしれないが、カリキュラムに問題があるようにも思えた。統計学の手法、成果を計算機科学に取り入れることは重要と

思えるのは間違いであろうか？

参考文献

- [1] Lawrence T. and Giles, C.L. (1998) , *Searching the World Wide Web*, April 3; 280: pp.98-100. (in Report)

6 チェンナイ国際会議に参加して

景山 三平 (広島大学教育学部)

「統計的方法とその応用の発展に関する国際会議」が平成12年12月21日～22日に、インドのチェンナイ (マドラス) で開催された。インドでは珍しく4星ホテルでの実施であった。27度の気温にもかかわらずお陰で快適に滞在できた。参加国数は8か国で参加者数は延べ160名であった。我が国からの参加者に大和 元氏 (鹿児島大学) がおられました。

会議の主体は南インドの総元締めである1857年創設のマドラス大学である。統計学分野の総合的發展を目指して今まで数多くの国際会議を開催しているが、今回は昨年に続いて開催され1941年創設の統計学科のPonnuswamy教授とSuresh教授の60歳誕生日を祝っての国際会議でもあった。様々な分野の研究者28名が招待され講演を行うことが主な活動であった。2つの記念講演を除いて、すべて分科会形式で進められ、実質2日間に渡って大変窮屈にまた遅れ気味に進行した。そのためすべての発表に全員が参加できなかった。構成は、45分間の記念講演 (2編)、30分間の招待講演 (15編)、15分間の一般講演 (67編) がなされたが分科会のある会議にしても多すぎた。招待講演の内容は多岐にわたっていたが、一般講演の内容については、線形モデルとデザイン、推測と応用、品質管理、時系列、OR、信頼理論、回帰と実験計画、待ち行列と線形計画法、応用統計、医学統計に分かれていた。特に南インドで関心の高い品質管理に関する論文発表は多かった。

この会議では、統計科学に関連して最新の話題

についての研究発表・討論・情報交換を通し総合的發展を視野にいれ世界のリーダたらんことを目指していた。特に実験計画法と数理統計学に関するテーマに対する最新の研究結果についての幅広い精力的な情報交換を通して理論的側面からの多角的な発展に貢献できた。実験計画法は、1920年代より科学的に研究されている分野で、多くの応用場面をもっているが、本会議にも実験計画法に関する発表時間帯があり、私はそこでの招待講演者であった。

統計科学は、ここ半世紀の間特に急速に発展してきた分野で、新しい理論構築と共に多くの応用場面をもっている。この分野の研究の中心の一つであるインドでは、活発な教育・研究活動が行われその研究者の層は厚い。統計科学で目指しているものは実質科学の分野でよく用いられるテーマで、多くの研究分野を包括している。この会議に参加して、彼らから様々の実験の応用に関する情報や知見を得ることができたことが最大の収穫であった。

特に今回の会議では、統計科学のいくつかの分野の人と種々の話題について意見交換できたことと新しく研究者A.Subbarayan, M.R.Srinivasan, H.Iyer, S. Provostらと特に親しくなり今後の研究情報交換がより容易になったことも収穫である。更に、今回の滞在中にマドラス大学教授の紹介と称してチェンナイの会社 (Eagle Press Private Limited) の人から実際的な実験計画についての相談を受け対応したのは、大変有意義で充実した経験

であった。この件に関しては、帰国後もファックス等で対応をさせられ、途中コミュニケーションの困難さが生じてきましたので、結局カルカッタとデリーのインド統計研究所の友達を紹介して私の手から離れました。

世界の状況とは異なり、日本では実際の観点から考察している統計学者・組合せ論研究者の絶対数は少ない。これには様々な原因が考えられる。その一つは、先ず日本数学会・日本統計学会の中でそのような研究姿勢が明確に正当化されていないため、日本ではそのような視野をもった若い人がなかなか育たない。世界では例えば統計学会等には実際場面を想定した分科会が組織されその活動は大変活発である。やはり、大学に統計学科が設置されそこでの組織的な後継者養成が行われている海外はすばらしい。もう一つは、我々大学人の責任でその努力が足りないのだろう。大学にもっと実際場面を意識した内容を含む講義科目を開設すべきである。

いつも感じることであるが、理論家をもっと応用分野のことも視野にいった研究を実施すべきである。理論家と応用家の共同研究の環境作りが必要である。世界の動向を見ると、興味をもっている人が集まり共同研究し結果を有効に出している。電子メールやFAX等が進んだ現在でも当然であるが、同様な研究テーマをもつ人がいかに密に

会える体制にあるかが昨今の研究には必要不可欠だと思う。それが海外では実現されつつあると感じた。日本の同様な対応も考えられてよい。とにかく、共同研究プロジェクト方式で研究活動を積極的に進めるべきである。特に、実験計画法・組合せ論に関する研究は意外と競争が激しく研究結果の優先性を主張する場合もあり、最近では共同研究のスタイルが主流となってきている。

会場と（外国人の）宿泊が同じホテルであったので、講演会場外での議論・情報交換が容易であり、実り多い有意義な情報収集が可能であった。冷房も効きすぎるぐらい効いて快適であった。今まで結構多くの国際会議に出席しているが、インドでの国際会議がホテルでは初めての経験であった。また、各招待講演者が30分の講演時間では発表・討論時間が十分に保証されたとは言えなかった。最低45分間は必要であろう。一般講演の中には、質の悪いものもあったが、これはこの会議には発表論文の事前審査がなかった(?)ことが原因のようである。昼食・晩餐や社会プログラムが同じ場所で実施されたので、開放的な雰囲気の中で密な討論が更に容易にできる配慮がよかった。旅費や滞在費は自己負担であったが、招待者の会議登録料はなしで、空港への送迎は適切に実施され快適な待遇であった。

7 海外研修雑記

西尾 敦（明治学院大学）

1999年度大学から1年間の研究休暇をもらい、9月から翌3月まで、イタリア、FlorenceにあるEuropean University Institute (EUI) で勉強した。EUIは、「EU立」の文科系大学院大学で、1学年120人ほどのPh.Dの学生を教育している。スタッフは全員短期（4～8年）の契約で、各方面での有名人を比較的高給で集めている。ヨーロッパ独自のテーマを研究するという趣旨の下30年ほど前に設立され、history, law, political science, econom-

icsの4学科から成っている。自然科学は「international」だからここでは扱わないとのことであった。もっとも私が居候した経済学科では、必ずしもヨーロッパ固有の研究をしているようには思えず、どこでも年月が経つと、当初の目的が風化するものらしい。

学生は世界中から集まっているがEU加盟国を中心に受け入れている。EUの運営は加盟国間の公平を原則としているため、EU諸国については

分担金に応じて国ごとにおよその受け入れ枠があるらしく、学生・スタッフの出身地は実に様々であった。試しに入ってみたイタリア語のクラスではカップル以外は全員国籍が違った---イギリス、アメリカ、オランダ、ドイツ、フィンランド、ギリシャ、トルコ、ウクライナ、オーストラリア・・・。授業自体には、落ちこぼれてしまった(何しろ、「アッローラ」で始まってほとんどイタリア語で進める。肝心なところはテキストに書いてあることを読んでいるらしいのだが、どこを読んでいるのか、なぜか私だけが分からない)。

イタリアの現Amato首相は、私の滞在当時、法律学科の教授であった。EUの閣僚会議などがFlorenceで開催されると、参加する閣僚を招いて、EUIでサテライトのシンポジウムなどを開かれる。そんなときは、加盟国の国旗と警備の警官で賑やかであり、この大学のステイタスの高さを示していると思われた。

大学内では公用語は英語で全く困らないが、一歩外にでると英語がほとんど通じずいろいろと生活には不自由した。が歴史のある(Firenze=Florenceはfiore=flowerに通じ、文字通り)花の都で、いろいろと見るところもあり、それなりに楽しめた。もっとも、イタリア入国の翌日Milanoでスリにやられ、また各種の登録に役所などへ行くとどこでも長い待ち行列にうんざりで、この国自体にはあまりいい印象が持てない。役所の対応に関しては、たぶん日本も同じように外国人の間で評判が悪いのではないかと想像される。円高+EURO安で、いろいろなものが安く見え、スラれた額などは十分取り戻したような気がしている。通貨の単位リラはご存じのように桁が多く(現在、1

円=約19リラ)、あたかもミレリラという単位があるかのように聞こえ、3桁単位に区切るヨーロッパ語の数字の読み方に慣れた。ほどほどに近隣地域の観光もした。Pisaにいてみると、塔は確かに傾いていて、期待以上でも以下でもなかった。ただ、カンポ・サント(聖人墓地)というところの隅に、Fibonacciの石像があり、これを見ただけで往復交通費=16,000リラはそれ以上の価値があった。

傍目の観察によると、EUIではpolitical scienceとhistoryに人気がある。対照的にEconomicsでは基礎科目としてミクロ・マクロ経済学、統計学に重点を置いたカリキュラムが学生の負担らしく人気が今ひとつのようだ。一般に数理的手法に直接に依存する分野は世界的に低迷している。ただし、自然科学が全体として衰退しているわけではない。自然科学は、天体力学に象徴されるような数学的すなわち形式論理的で精密なものから、複雑な対象を扱うべく、その論理・方法を変化させている。あるいはそういう方法(複雑科学的方法)で扱うべき対象に研究の重点が移動したというほうが正しいかもしれない。「複雑さ」対象によって異なりそれに応じて様々なアプローチがとられている。その結果、「理科系」分野全体としての統一性がやや失われた観がある。C.P.Snowは「2つの文化」で文系・理系の乖離を指摘したが、私には理系側の変化によってこの両者が接近しているように感じるがいかがであらうか。

いずれにせよ、方法科学としての統計学はこうした変化の影響は大であると思われるが、それがいかなるものであるかは、私には手の届かない難題である。

8 国際会議へのお誘い

8.1 計量心理学会国際大会 (IMPS2001)

開催のお知らせ

組織委員会委員長 柳井晴夫

このたび計量心理学会国際大会 (International Meeting of the Psychometric Society, IMPS-2001) が

今年7月15日-19日の予定で大阪大学コンベンションセンター(吹田キャンパス内)で開催されることになりました。計量心理学会国際大会は1936年以来毎年アメリカ、カナダで、さらに、1979年からは隔年にヨーロッパで開催されており、欧米以

外で開催されるのは今回が初めてとなります。本大会は雑誌「Psychometrika」を発行しているサイコメトリックソサエティ（The Psychometric Society）と55名のメンバーからなる組織委員会が主催するものですが、日本統計学会、日本行動計量学会、日本心理学会、と大阪大学人間科学部の後援をうけ、さらに、全部で28学会の協賛を得ております。すでに1月20日で発表申し込みを終了しましたが、これまでに、一般セッション発表、招待セッションでの発表をあわせ、全部で240近い発表申し込みがあります。さらに、申し込まれた内容のカテゴリ別頻度は項目反応理論、構造方程式モデル（共分散構造モデル）、応用例、ベイズ的統計推論、因子分析、主成分分析、統計的推論と統計的モデル、といった順になっており、この他に、独立成分分析、多相データ分析、モデル選択基準、ニューラルネットワーク分析等の招待セッションも準備されています。なお、この会の詳細と参加申し込み方法につきましては、

<http://www.ir.rikkyo.ac.jp/imps2001/>

を参照してください。なお、参加費は日本統計学会会員の場合、2万円（6月1日以前）、2万5千円（6月1日以降）、また、学生・大学院生の場合、1万円（6月1日以前）、1万5千円（6月1日以降）となります。奮ってのご参加を期待しております。

8.2「情報社会のための統計に関するIAOSサテライト・ミーティング」の開催について

総務省統計局 山石雅之

総務省統計局では、本年8月に東京において「2001年ISIサテライト・ミーティング」を開催します。この会議は、本会議直前に韓国において開催される「第53回ISI大会」の関連国際会議（サテライト・ミーティング）として位置付けられており、官民間問わず広く統計分野における交流の場として活発な議論が展開されることを期待されております。会議趣旨および概要を以下に紹介します。

今、世界はデジタル情報通信技術の飛躍的發展

に象徴される情報技術（IT又はICT）革命の真只中にあり、技術の進歩は今世紀においてもその主役を担うと言われています。この技術革新は世界の経済・社会にも大きな変化をもたらし、21世紀においてその流れは一層加速するものと予想されています。このITの可能性を最大限に生かしつつ、21世紀における経済・社会の発展を確保するためには、こうした流れを的確に把握し、展望していくことが不可欠であります。

このような背景のもと、「統計」は経済・社会を映す鏡であり、未来を築いて行く礎でもあります。IT革命により経済・社会がかつてない質と規模の変化を経験しつつある現代において、今日の統計に寄せられる期待とその果たす役割は計り知れないものがあります。すなわち、これらの変化の中で我々は何を捉えていくべきか、また、それらを統計によりどのように把握していくかについて、各国政府、国際機関、経済界、学界、言論界等各界挙げての検討と議論が開始されています。さらに、その検討と議論は急速に進行するIT革命に統計が即応すべく、今や喫緊の要請となっています。

このような状況の下、今回、世界におけるIT先進国の一つである日本において、各国の有識者等がその英知を持ち寄り、IT革命の現状を踏まえ、「情報社会のための統計」について意見交換を行うフォーラムを設けることは、極めて有意義であり、各国が21世紀においてIT革命の成果を享受し、飛躍的な発展を遂げるための大きなステップとなることを確信しております。

本サテライト・ミーティングのメインテーマ「情報社会のための統計」は新しい分野であるため、特にトピックスを限定せず、幅広く討議がなされるよう多数の論文を歓迎しております。一例として、1）電子商取引の測定、2）経済・社会におけるICTの影響と測定、3）統計の作成・利用におけるICTの応用、4）情報社会のための統計整備、実態把握、分析等に関する国際機関及び各国統計機関の取り組み状況などが挙げられます。

会議概要

日時：平成13年8月30日（木）～8月31日（金）

場所：アルカディア市ヶ谷（私学会館）

〒102-0073東京都千代田区九段北4-2-25

主催：総務省統計局・統計センター

後援：国際官庁統計協会（IAOS）、日本統計学会、
日本統計協会、統計情報研究開発センター
他

*論文投稿される方は3月30日（金）までに参加
登録が必要となります。論文の提出期限は6月
15日（金）です。その他詳細は、会議ホームペ
ージ

<http://www.stat.go.jp/english/iaos/>

を参照もしくは事務局にお問い合わせくださ
い。

会議事務局：総務省統計局総務課内

「IAOSサテライト・ミーティング事務局」

〒162-8668 東京都新宿区若松町19-1

電話（03）5273-1116 FAX（03）5273-1180

E-mail:tokyo.iaos@stat.go.jp

8.3 VII-th Intelligent Statistical Quality Control

に関する国際Workshopの御案内

日本側プログラム委員 浅野長一郎

本Workshopは、20余年に亘る伝統的な品質管
理の数理的理論と運用に関する研究会組織で、各
回3年ごとに開催され、その成果はPhysica-Ver-
lag又はSpringerから、論文成書“Frontiers in Sta-
tistical Quality Control”として出版されています。
近年、日本の斯界では数理科学としての品質管理
論でなく、観念的な運用論が主流で、むしろ統計
の品質管理を殆ど不要と軽視する傾向にあるのは
誠に残念です。日本の統計学研究者の積極的な参
加が要望されます。

●会長：Professor H.-J. Lenz 及び P.-TH. Wilrich
The Institute of Statistics and Econometrics
Free University of Berlin, Germany
Email: wilrich@wiwiss.fu-berlin.de

●会期：2001年9月5日～7日

●場所：University of Waterloo, Waterloo, Ontario,

Canada

●主催会長：Professor Stefan Steiner

Dept. of Statistics and Actuarial Sciences

University of Waterloo, Waterloo, Ontario

Email: shsteine@uwaterloo.ca

●論文締切り：アブストラクト（1頁限度）：

2001年4月30日（査読による採否通知：2001
年5月15日）

●査読後の最終論文提出：2001年8月1日

●上記の送付先き：アジア圏は、下記宛にE-mailで。

大阪府堺市百舌鳥梅町4-804（〒591-8032）

大阪府立大学工学部経営工学科

太田 宏 教授

E-mail: ohta@ie.osakafu-u.ac.jp

Tel: 0722-52-1161, Fax: 0722-59-3340

●プログラム委員会（9名）：D.H.Baillie (UK),
E.v.Collani (Ger.), H.-J.Lenz (Ger.), H.Ohta
(Jpn), S.Steiner (Can.), P.Thyregod (Den.),
P.-Th.Wilrich (Ger.), W.Woodall (Ame.),
Ch.Asano (Jpn)

●参加者：大凡35名に限定。

8.4 第4回ARS（アジア圏計算機統計学会）

Bangkok開催のご案内

アジア圏世話役 浅野長一郎

ARS（アジア圏計算機統計学会）は、ISI,
IASCの組織で、欧州でのCOMPSTATに対応する
アジア圏での計算機統計学会です。1998年に第3
回ARSがManilaで開催されました。これに引き続
き、以下の要領で表記の第4回学会がBangkokで
開催されます。広範な話題で受理しておりますの
で、奮ってご参加下さるようご案内申し上げます。

●会期：2001年12月20日～22日

●場所：Chulalongkorn大学（Bangkok,Tailand）

●論文締切り：2001年9月15日

●会長：Professor Virach Aphimeteetamrong,
(Dean)

Email: Virach.A@chula.ac.th

Fax.No.: (662) 254-4256

●事務局：Professor Siriporn Sagetong

(Head of Dept. of Statistics)

Chulalongkorn University

204 Soi Watmaipiren, Wathpr Phaya Thai Road,

Khet Prathunwan, Bangkok 10330, Thailand

Tel. (662) 218-5878

Email: fcomssg@phoenix.acc.chula.ac.th

●日本側問合せ先：

山口和範 (kyamagu@rikkyo.ac.jp)

浅野長一郎 (QYG04340@nifty.ne.jp)

なお、詳細は上記のChulalongkorn大統計学科の事務局およびIASCからAnnouncement (Call-for Papers) が出る予定です。

9 研究部会活動中間報告

9.1 「データマイニングにおける統計的手法と実際」

主査 鎌倉稔成 (中央大学理工学部)

コンピュータの高速化と、データの蓄積技術の進歩および蓄積のためのデバイスの大容量化に伴い、データ量は急速に肥大化してきた。これまでのデータ処理のための伝統的な統計手法では、あまり大量ではないが、精度の高い、確率モデルの構築しやすいものを対象としてきた。しかしながら、近年は、目的が必ずしも明確ではなく、データを蓄積し、後になって目的に応じてそのデータから情報を抽出するという方法がとられている。

データの技術や情報の抽出方法については、各分野で研究が行われ、また、議論がなされている。精緻な実験計画に基づくデータ収集が行われないにしろ、これらデータを複合的に扱うデータマイニングの手法を統計的立場に立って吟味してみる必要がある。

本研究部会では、まず、第1年度として、OR分野の研究者との研究交流を行い、意見交換をし、その中で第2年度に向けての方針を模索した。OR分野からは、データマイニングでのアルゴリズム理論と重み付き再サンプリングに基づく最適な情報抽出に関しての話題を中心に議論を行った。統計側からは、クラスタリング手法の新しい展開に関してファジイ手法に基づくクラスタリングおよび大規模データの解析法と統計手法の関わり合いにおいてデータマイニングに関しての議論を行った。

関連分野の論文収集と論文紹介として大学院の

学生を中心に、データに関する論文を収集し、メンバーに論文紹介を行う形で、現在どういう話題がデータマイニングの領域で重要な問題になっているのかを探索的に論究した。同時に、地理情報関連分野との連携を深めるため、その分野で蓄積されている大規模なデータに対して現在進んでいる別のプロジェクト「統合型地理情報システム」の研究のシンポジウムにも積極的に参加して交流を行った。

9.2 「環境データの解析」

主査 清水邦夫 (慶応義塾大学)

本研究部会は、人工衛星からの地球環境データとともに地上、地中、海洋等で得られる環境データの解析を主題として発足致しました。

地上、海洋等で得られるデータの種類の多さと言うに及ばず、人工衛星からのデータの種類もさまざまです。LANDSAT衛星データの利用により、土地被覆分類に関係して土地利用状況の把握、森林管理、都市内緑地状況の広域変化や経年変化の把握などへの応用がなされています。1996年8月に打ち上げられたADEOS (Advanced Earth Observing Satellite) 衛星の運用期間は10ヶ月余と短期間でしたが貴重なデータが蓄積され、大気環境データ等の今後の有効利用が期待されています。1997年11月には世界で初めて降雨レーダを搭載したTRMM (Tropical Rainfall Measuring Mission) 衛星が打ち上げられ、1997年から1998年にかけての今世紀最大のエルニーニョ現象を宇宙から見ることを可能にさせました。今後も多くの衛星が打

ち上げられる予定です。

衛星だけでなく、深海底を掘削することにより柱状の地質資料を採取・分析等を行う計画も提案されています。クリギング手法はそのようなデータを解析する上で有力な手法の一つを提供していると考えられます。クリギングは、またその発端に見られるように鉱物資源データの解析に有効であることが知られていますが、本研究部会では資源の用語をもう少し広く、たとえば農作物のような生物的な資源も含めて捉えることにし、資源データも対象としています。

統計学の手法に関しては、幾何補正に関するモデル化、土地被覆分類に関して判別分析やニ

ューラルネット、空間点過程やクリギング等の空間データモデリング、混合分布モデル、一般化線形モデルの一般化、カルマンフィルター等、さまざまな事柄が関係します。これらの研究を進めるためには学際的な視点が不可欠ですので、さまざまな科学技術分野の専門家との開かれた共同研究を目指しました。

研究部会の進め方は、初年度は、原則として研究部会メンバーを含む高々数名のグループ毎に研究を進めることと致しました。しかし、グループ間の連絡を密にすることには気を配りました。次年度は、互いの研究成果を持ちより意見交換をできる機会を設定する手はずを整えています。

10 2000・2001年度第2回評議員会議事録

日時：2000年11月11日（土曜日）13：00～15：15

場所：統計数理研究所会議室

出席者：会長：三浦由己 理事長：小西貞則

評議員：青嶋 誠，浅野長一郎，伊藤彰彦，伊藤孝一，伊藤 聡，鎌倉稔成，川崎 茂，栗木哲，佐藤 学，杉山高一，鈴木和幸，瀬尾 隆，富澤貞男，土屋隆裕，中野純司，浜砂敬郎，平川孝三郎，広津千尋，前園宣彦，松田芳郎，松縄 規，丸山久美子，水田正弘，村上征勝，村上正康，森棟公夫，矢島美寛，山口和範，山本拓，美添泰人，渡辺美智子

委任状：2名

冒頭、三浦会長より挨拶があり、定足数を満たしていることが確認された。

＊＊報告事項＊＊

<議題1> 各理事からの報告

【会誌編集】小西理事長より、欧文誌第30巻第2号は、旧編集委員会が予定通り12月に発行し、第31巻からは新編集委員会が発行予定であるとの報告があった。和文誌については、矢島担当理事より現在のところ投稿論文は2つであるとの報告があった。

【大会企画】鎌倉担当理事より、資料に基づき、

2001年度大会の共通テーマについて説明があった。さらに大会の講演時間は一律20分とすること、報告集はB5で1件2ページとすることが報告された。

【広報】瀬尾担当理事より、国立情報学研究所の電子図書館サービスに会誌を登録し、インターネット上で論文の閲覧ができるようになったとの報告があった。渡辺担当理事より、会報は12月に発行予定である旨報告があった。

【渉外】広津担当理事より、2002年度の第70回大会は、他の統計関連学会と合同で開催する方向で交渉を進めているとの報告があった。

【学術会議関係】松田評議員より、日本学術会議第18期研究連絡委員会として、統計学研究連絡委員会と経済統計学研究連絡委員会が設置される予定であるとの報告があった。これに関連して、小西理事長より、統計学研究連絡委員として竹村彰通氏と渡辺美智子氏を推薦した旨報告があった。

【庶務会計】伊藤担当理事より、資料に基づき2000年度チュートリアルセミナーおよび学会賞の会計報告があった。

<議題2> 欧文誌の出版形態について

小西理事長より、欧文誌の電子化及び外国出版社による出版に関して、まず2001年度はTerra社

に電子化及び印刷を委託し、その後Terra社を通じてKluwer社に海外での販売を委託する予定であるとの説明があった。これに対し、国立情報学研究所の電子化ソフトを使ってはどうかとの意見が出されたが、将来的には検討することとし、2001年度はTerra社に委託することで了承された。また、販売経路が変更されると販売部数が減る場合もあるので注意をして欲しいという発言があった。

＜議題3＞監事の選任について

三浦会長より、監事は松縄規氏と浜砂敬郎氏に委嘱した旨報告があった。

＜議題4＞特別委員会・統計教育委員会からの報告

〔学会組織特別委員会〕矢島主査より、前委員会からの引継事項である高齢特別会員制度、社団法人化、支部の創設について議論したとの報告があった。

〔学会活動特別委員会〕杉山主査より、前委員会から引継を行ったとの報告があった。

〔統計教育委員会〕村上委員長より、資料に基づき前委員会の活動報告があった。

＜議題5＞研究部会の終了報告、中間報告

伊藤理事より、資料に基づき「数理科学における諸手法への統計科学的アプローチ（川崎能典主査）」、「統計学におけるインターネットの利用（中野純司主査）」、「非線形時系列解析と金融工学（谷口正信主査）」の3件の終了報告および「環境データの解析（清水邦夫主査）」、「データマイニングにおける統計的手法と実際（鎌倉稔成主査）」の2件の中間報告があった。

＜議題6＞その他

三浦会長より、2001年のI.S.I.に関連して、韓国の組織委員長より学会長宛に、I.S.I.に多数参加して欲しい旨の連絡があったとの報告があった。

＊ ＊ 審議事項 ＊ ＊

＜議題1＞研究部会の新設について

伊藤理事より、資料に基づき2件の研究部会の

新設申請の説明があった。審議の結果、「非線形時系列解析と金融工学Ⅱ（谷口正信主査）」、「統計学におけるインターネットの活用（森裕一主査）」の2件とも2年間とすることで承認された。

＜議題2＞学会賞選考委員について

三浦会長より、選考委員の構成は、日本統計学会賞規程に基づいて行い、評議員会の承認は、後日、郵便によりお願いしたい旨の提案があり、了承された。

＜議題3＞小川研究奨励賞規程について

小西理事長より、資料に基づき、小川研究奨励賞規程案の説明があった。条文の形にしてはどうか、という意見が出されたが、学会賞規程と形式を揃えるために案の形のままとすることで承認された。また共著者の年齢に関して規定が必要ではないか、との意見が出されたが、厳密な規定は設けず、選考にあたっての判断は選考委員会に一任することとした。

＜議題4＞次期会長候補者の選出について

三浦会長より、会長候補者の選出方法について説明があった。ついで小西理事長より、3名が会長候補者として推薦されている旨説明があった。その後投票により、杉山高一氏が過半数を獲得し、次期会長候補者として選出された。

＜議題5＞選挙管理委員の選出について

三浦会長より、栗木哲氏及び渡辺則夫氏を選挙管理委員に委嘱したい旨発言があり、了承された。

＜議題6＞入会希望者の承認

三浦会長より、資料に基づき6名の入会希望者の説明があり、審議の結果承認された。

＜議題7＞除名者の承認

三浦会長より、資料に基づき11名の凍結会員の説明があり、再度連絡がつかない場合には除名とすることで了承された。

＊ ＊ ＊ ＊

会長としての最後の評議員会にあたり、三浦会長より挨拶があった。

11 日本学術会議報告

第4部統計学研究連絡委員会委員長 吉村 功

はじめに

第18期日本学術会議つまり今年7月からの3年間、第3部の経済統計学研究連絡委員会を松田芳郎氏、第4部の統計学研究連絡委員会を小生（吉村）が、担当することになりました。先日2人で相談をして、関連学会に知らせた方が良く考えたことは、それぞれ自分のペースで関連学会に報告しよう、ということにしました。その一つとしてこの報告をします。報告内容の取捨選択は極めて主観的ですが、誤りはしないつもりです。疑問がありましたら、お問い合わせ下さい。

1. 統計研連

統計学研究連絡委員会、通称では統計研連、には14人の委員がいます。名前は、佐伯胖（第1部）、堀部政男（第2部）、松田芳郎（第3部）、吉村功（第4部）、久米均（第5部）、鈴木和夫（第6部）、角田文男（第7部）、大瀧慈（計量生物）、景山三平（数学）、竹村彰道（統計）、垂水共之（計算機統計）、馬場康維（行動計量）、柳川堯（応用統計）、渡辺美智子（統計）です。

第1回会合を12月9日に開きました。委員長に吉村を、幹事に竹村、渡辺を選びました。今後統計研連に何かを言いたいときはこのうちの誰かにご連絡下さるのが良いと思います。

今期の重点課題として、①統計学関連学会の協調、②統計学のフロンティアの拡大と他分野における統計科学の意義の明確化、③アジアレベルでの統計学研究者の交流を図る、の3つを取り上げることとしました。具体的に何をするかは、これからの検討課題です。

統計研連は、科研費申請の分科「統計科学」は現在「複合領域」に入っています。この「複合領域」をさらに、人文社会系、理工系、生物系、その他、に分類し、「統計科学」を「人文社会系」に入れようという案が、学術会議からでて来まし

た。これについては「非常に困る」という回答をすることにしました。ちなみに、「統計科学」の申請件数は毎年約140件程度で横這いになっています。もっと申請が多くなって良いのではないのでしょうか。科研費で外国出張や外国人の招待が可能ですから、尻込みをしないで積極的に申請をするようにして下さい。

2. 日本学術会議での議論

本会議と部会が10月30日～11月2日までの4日間、六本木の学術会議場で開かれました。会長は前期に続いて吉川弘之氏が再任されました。今期の重点課題が審議され、①人類的課題解決のための日本計画（Japan Perspective）を提案すること、②学術の状況並びに学術と社会との関係に依拠する新しい学術大系を提案すること、の二つが採用されました。

ところで、「学術」って何でしょう？日本の学術を代表する（私を除く）有名人209人の誰もこれに明快に答えることはできませんでした。私も答えることはできません。こういう間には、外延的にしか答えられない、というのが正直なところでしょう。つまり、学術会議が、「そうだ、役に立つ存在だ」と社会認識されるような活動をして社会がその存在をあるイメージで捉えるようになったとき、初めて「学術」が市民権を持つことになります。ところが現在では、大学でやっているようなことという程度のイメージしかないのではないのでしょうか。ということは、学術なるものがそれほど大したことはやっていない、ということの意味しているように私には感じられます。それをどうするのがよいか、前期でもいろんな機会にそれを考えたのですが、まだ他人を説得できような論理構築はできていません。今期はもう少し突き詰めて考えていきたいと思っています。

今期に初めて採用されたことに、「旧姓使用の

容認」があります。夫婦別姓論議は、まだ民法としては決着が付いていませんが、日常社会では、旧姓使用の方が自然な場面が多くあります。それなのにお上だけはそれを頑なに排除していました。それが変わったのです。つまり「国家公務員の任用関係においては、公務員としての身分保障や権利にかかわることから、個人の同一性を識別する方法として戸籍名が用いられてきている。この基本原則はこれまで同様尊重して行くものの、一部において旧姓や通称名等の使用が認められている事例があること、研究者の利益を確保する必

要もあること等を総合的に勘案し、旧姓、通称名等の使用については下記要領により取り扱うこととする。」ということで、実質的に旧姓、通称を用いて差し支えない、という通達が来ました。統計研連では、渡辺美智子氏にその適用が許されました。このようなことをもっと進めたいと考えています。学術会議でさえこういうことが認められているということで、女性研究者の皆さんは、勤務先等でも必要な場合には、この種の要求を出されるのがよいように思います。

12 会合および外国人研究者来日案内

■会合案内

2001年3月

*3.24:「QOL測定における信頼性と妥当性第3回シンポジウム」基盤研究(A)(1)「統計学における理論と応用の総合的研究」(研究代表者:杉山高一)研究分担者&オーガナイザー:丸山久美子(聖学院大学人文学部)

時:11:00~17:00

場所:統計数理研究所講堂

連絡先:統計数理研究所村上研究室
(TEL03-5421-8766)

講演内容:「医療経済の選好に関するQOL尺度について」,「カテゴリー評価の数量化とQOL尺度の正当性」,「出産障害におけるQOL評価の実際」

2001年4月

*4.5-4.6:応用統計学会・日本計量生物学会2001年度合同年次大会

場所:総評会館(〒101-0062 東京都千代田区
神田駿河台3-2-11)

地下鉄千代田線「新お茶の水」駅B3出口0分)

2001年7月

*7.15-7.19:計量心理学会国際大会(IMPS-

2001)

大阪大学コンベンションセンター

<http://www.ir.rikkyo.ac.jp/imps2001/>

2001年8月

*8.22-8.29: the 53rd Session of the International Statistical Institute in Seoul

<http://www.nso.go.kr/isi2001/>

*8.30-9.1: 計算機統計学会第15回シンポジウム

大阪大学コンベンションセンター

<http://www.jscs.or.jp>

[ISI2001サテライトミーティング]

*8.20-8.21: ISIS 2 (Business and Industrial Statistics)

場所:慶応義塾大学矢上新棟

<http://www.stat.t.u-tokyo.ac.jp/isis21/>

*8.30-8.31: 情報社会のための統計に関するIAOSサテライトミーティング

主催:総務省統計局

場所:アルカディア市ヶ谷(私学会館)

東京都千代田区九段北4-2-25

会議事務局:総務省統計局総務課内「IAOSサ

テライト・ミーティング事務局」
電話 (03) 5273-1116 FAX (03) 5273-1180
E-mail : tokyo.iaos@stat.go.jp
<http://www.stat.go.jp/english/iaos/>

*** 8.30-9.1 : 計算機統計学の最近の潮流と医学・生物学への応用国際会議**
大阪大学コンベンションセンター

<http://www.jscs.or.jp/ICNCB/>

森 裕一 mori@soci.ous.ac.jp

(岡山理科大学総合情報学部社会情報学科)

*** 8.30-9.1 : 環境と健康 : 統計科学からの挑戦国際会議 (International Conference on Statistical Challenges in Environmental Health Problems)**

開催場所 : 福岡市早良区百道浜,
福岡ソフトリサーチパーク

(<http://www.math.kyushu-u.ac.jp/ISCEP/>)

連絡先 : 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学大学院数理学研究院

柳川 堯 (yanagawa@math.kyushu-u.ac.jp)

Tel : 092-642-2765

2001年9月

*** 9.14-9.16 : 日本行動計量学会第29回大会**

場所 : 甲子園大学

連絡先 : 〒665-0006 宝塚市紅葉ガ丘10-1

TEL : 0797-87-5111, FAX : 0797-87-5666

bsj2001@koshien.ac.jp

<http://www.koshien.ac.jp/topic&event/event/bsj2001/>

■外国人研究者来日案内

氏名 : (1) Professor Stanislaw Mejza,
Dr. Habilitation

(2) Professor Iwona Mejza,
Dr. Habilitation

略歴 : (1) 1948年ポーランド生まれ,
1976年 Ph.D, 1986年 Habilitation
現在, ポズナニ農業大学教授

(2) 1950年ポーランド生まれ,
1985年 Ph.D, 2000年 Habilitation
現在, ポズナニ農業大学準教授

来日目的 : 実験計画法に関する共同研究

来日期間 : (1) 2001年2月7日から3月14日

(2) 2001年2月7日から2月21日

日本での主な滞在先 : 慶應義塾大学, 広島大学,
明星大学, 筑波大学など

世話人 : 景山三平 (ksanpei@hiroshima-u.ac.jp),
神保雅一 (jimbo@math.keio.ac.jp)

〒223-8522 横浜市港北区日吉3-14-1

慶應義塾大学理工学部数理科学科 神保雅一

Tel : 045-566-1439, Fax : 045-566-1657

13 教官公募のお知らせ

■筑波大学大学院経営・政策科学研究科教員公募

1 募集分野 数理科学 (ファイナンス理論)

2 職 名 助教授または講師

3 所 属 社会工学系

4 勤務場所 大学院修士課程 経営・政策科学研究科経営システム科学専攻 (専ら,
夜間において授業を行う専攻)

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1

5 採用人員 1名

6 応募資格

(1) 博士またはPh.Dの学位,
博士論文に相当する公表された研究論文

1 編,

博士論文に相当する高度な実務業績,
のいずれかを有していること。

(2) 査読つき研究論文,

前項と同等の研究論文ないし書籍,

前2項に匹敵する実務上の業績 (作品・
特許等),

をあわせて4編 (件) 以上有していること (講
師の場合1編 (件) 以上)。ただし, 印刷中の
ものを含んでもよい。

(3) 上記専門分野において3編以上の博士ない
し修士論文の実質的な指導を行っているこ

と（講師の場合は、2編以上の博士ないし修士論文の実質的な指導を行っていること）、または、これと同等の教育実績があると認定されること。

7 採用時期 決定後なるべく早い時期
（平成13年9月1日以降）

8 選考方法（1）書類審査
（2）面接

9 提出書類（1）履歴書（ワープロ可）
（2）研究業績一覧（同上）
（3）主要研究業績（5編）の別刷り
またはコピー

10応募締切 平成13年3月31日（土）

11提出先 〒112-0012 東京都文京区大塚
3-29-1

筑波大学大学院 経営・政策科学研究科
副研究科長（経営システム科学専攻）河合忠彦

（注）応募書類送付の際には封筒表に「数理科学（ファイナンス理論）」と明記して書留郵便でお送りください。なお、応募書類は原則として返却いたしませんのでご了承ください。

12問い合わせ先

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1

筑波大学大学院 経営・政策科学研究科

教授 鈴木 久敏

電話：03（3942）6883

FAX：03（3942）6829

suzuki@gssm.otsuka.tsukuba.ac.jp

[不在の場合の連絡先]

学校教育事務部総務課人事係

電話：03（3942）6426

FAX：03（3942）6820

14 事務局から

投稿のお願いとお知らせ

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて1,000字以内をめぐりに原稿をお送りください。

来日統計学者の紹介につきましては、訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお寄せ下さい。さらに、求人案内（教官公募）なども受け付けております。また、修士・博士論文の紹介を行います。氏名（及び英文著者名）、学位名、取得大学名（専攻名まで）、論文タイトル（和文のときは、英文タイトルを併記）、主査名（または指導教官）をお送り下さい。

できるだけe-mailによる投稿、もしくは、文書ファイル（テキスト形式）の送付をお願い致します。

原稿送付先

〒112-8551 東京都文京区白山5-28-20

東洋大学 経済学部 渡辺 美智子 宛

Fax：048-460-3190

E-mail：kaiho@jss.gr.jp

（統計学会広報連絡用e-mailアドレス）

- ・ 日本統計学会ホームページURL：
<http://www.jss.gr.jp>
- ・ 住所変更連絡用e-mailアドレス：
jusho@jss.gr.jp
- ・ 広報連絡用e-mailアドレス：
kaiho@jss.gr.jp
- ・ その他連絡用e-mailアドレス：
jimu@jss.gr.jp

訃報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

松村雅央 会員 (2000年11月9日)

田口時夫 会員 (2000年12月29日)

退会者

松浦 宏, 小森泰男, 杉山文子, 染谷弘之,
北田修一, 加地紀臣男, Park, Sung Hyun,
松本正恒

現在の会員数 (2001年2月10日現在)

名誉会員	23名
高齢者特別会員	9名
正会員	1330名
学生会員	161名
総計	1523名
賛助会員	22法人
団体会員	3団体

長期関係断絶不能により退会したと見なされた者

小野崎保, 川勝昭平, 金 鉉延, 勢川英介,
高橋文明, 武田伸一, 趙 慶, 野口千明, 野
田知彦, 水野裕正, 渡部善平

ベストセラー

「SPSS 10.0J for Windows」 (日本語対応版)

優れたデータ管理、分析レポートとモデリング。貴方の研究に大いに活用ください!

最新バージョン SPSS10.0J は、分析ソフトウェアの新しい標準を打ち立てました。
膨大な量のデータに素早くアクセスし、迅速な分析を行います。

大量データを迅速にアクセスし、分析する

SPSS10.0J は、ファイルサイズの上限が事実上ないため、大量のデータに迅速にアクセス・分析することを容易に行えます。企業のデータベース、Web からダウンロードしたデータなど、データの種類に関わらず、データへのアクセスとデータ管理が今までにない、容易になりました。

分析のためのデータ準備を迅速に、そして容易に進める

複数のテーブル表を結合して、SPSS の読み込む前の段階で、SQL の知識なしにデータの準備を進めることができます。その後、SPSS10.0J で新しく設計されたデータ・エディターでデータの内容を調べることも容易にできます。

「Report OLAP」で最良の分析結果を提供する

OLAP 技術は、組織が情報を作成・共有する方法を変えます。SPSS の「Report OLAP」は、OLAP の「A」、すなわち Analytical (分析) の部分を何より重視します。状況に応じたその場での意思決定を下すために、情報を作成、配布、操作するための迅速かつ柔軟な機能を提供します。

総合的な機能でデータを分析する

要約統計、行列計算を超えた分析が可能になります。SPSS10.0J は、集約、度数、クロス集計、クラスター分析、記述統計、因子分析、回帰分析などの基本的な分析のために、以下のような広範囲な統計手法を提供します。そして、分析作業の終了後は、その結果をデータベースに反映させることが可能です。

大好評出荷中!!!

<< SPSS10.0J ホームページ>>

<http://www.spss.co.jp/product/ALL/base/index.htm>

SPSS

エス・ピー・エス・エス株式会社 〒150-0012 東京都渋谷区広尾 1-1-39 恵比寿プライムスクエアタワー 10F
Tel:03-5466-5511(代) Fax:03-5466-5621 e-mail:jpsales@spss.com URL <http://www.spss.co.jp>